

Finiteness と Fin 主要部の名詞性を巡って

赤 楚 治 之

1. はじめに

ヨーロッパ言語の文法で用いられてきた finiteness (定性) は、生成統語論に、定性を示す素性 [\pm finite] として導入されてきた。例えば、補文標識 (complementizer : C) が [+finite] を持つ場合は、*that* が現れ、値がマイナス ([-finite]) となれば、*for* で具現化されるというようにである。しかしながら、この finiteness の概念は、汎言語的に見るならば、単純には捉えられないものであり、finiteness を普遍的に定義することは不可能であるとさえ言われている。(Nikolaeva (2007) など。)

屈折 (inflection) や一致 (agreement) に欠ける日本語や韓国語では、定性の具現形を直接観察することができない。しかしながら、近年、談話情報と統語論の関係から、より精緻に統語構造を解明しようとするカートグラフィ (Cartography) 研究 (統語地図作製プログラム) を承けて、日本語生成文法でも、独立した Finite-head (Fin 主要部)、並びにその句レベルの Finite Phrase (FinP) を仮定することが積極的に行われ、補文標識に現れる「の」が finiteness の具現化であるという分析が支持を得ている。¹ これは日本語の CP 領域 (日本語では CP は文の後ろに現れるので、右端部 (right periphery) と呼ばれる) に生起する形態素の配列を、カートグラフィ分析に当てはめた場合、「の」が Fin 主要部の位置にあたることから、記述的に妥当な分析に見える。もし「の」が Fin 主要部の具現形であるとすれば、この形態素が形式名詞のひとつに分類されてきたことから分かるように、日本語の finiteness は何らかの名詞的要素 (名詞性) を持つこ

ととなる。² これは動詞と finiteness が結びついているヨーロッパ言語から見ると一見異質なように見えるかもしれないが、ヨーロッパ言語でも Fin 主要部には名詞性があると主張する研究 (Rizzi (2006) など) がある。Rizzi らは、Fin 主要部の持つ名詞性が、文には主語が必要であることを要求する「拡大投射原理 (Extended Projection Principle : EPP)」(或いは「主語要件 (Subject Criterion)」) を満たすことができるという。Rizzi らが EPP との関係から主張する finiteness の名詞性は、記述的な観点から導かれる日本語の finiteness の名詞性とは異質のものであるが、Endo (2007) は、Rizzi の分析が、日本語にも当てはまることを、日本語の終助詞を用いて論じている。

UG 的眺望に立つならば、類型論的に異なる言語で同じメカニズム (仕組み) が働いているという発見は、生成文法が誇ってきた魅力ある研究成果と言えよう。ただ、言語の起源、つまり進化論的問題 (「ダーウィンの問題」) を考慮する現在の生成文法は、UG を極度に制限されたもの (併合操作 (merge) のみ) とする立場を採り、それまでの UG 観とは一線を画す方向に向かっている。³ つまり、これまで我々が UG と見做してきたものに再考を促す必要性が出てきたということになる。そのような状況下にあっては、たとえ後退のように見えるかもしれないが、UG に依らない説明を探し当てるのが重要となってくる。⁴

本研究はその方向に沿った一つの試みである。具体的な目標は、Endo (2007) が Fin 主要部に名詞性がある証拠として取り上げた日本語のデータ ((ある種の) 終助詞付加による否定のスコープの変化) は、Fin 主要部の名詞性を持ち出さなくとも、日本語のガ格主語が終助詞の付加による情報構造的な影響で否定のスコープ内に留まることで説明できることを示すことにある。⁵ 本論文の構成は次の通りである。2 節において簡単に Finiteness について触れた後、3 節において日本語における Fin 主要部に「の」を仮定する Hiraiwa and Ishihawa (2002) を取り上げる。4 節では、Fin 主要部が満た

す主語要件を英語とフランス語で確認し、5節において同様の分析が日本語にも当てはまるとした Endo (2007) を見る。6節で Endo の分析の代案として、Akaso (2018) の談話構造と統語構造の相互作用に基づいた分析を概観した後、その分析が終助詞のデータにも有効であることを論じる。7節はまとめである。

2. Finiteness

2.1. Finiteness (Finite/Nonfinite) の概念

本稿では Fin 主要部が議論の中心になるので、ここで、finiteness という用語について簡単に見ておくことにしよう。この文法用語は、我々日本人にとっては馴染みの薄いものである。国文法でこの用語が用いられるのはほとんどないし、英文法（学校文法）においても同じである。このことは1992年に三省堂より出版された大部（約1800頁）の『現代英文法辞典』を見ても明らかである。見出し語としての finite form（定形）はあるものの、ここでは、「non-finite form（非定形）の項目を見よ」というクロスリファレンスの指示があるにすぎない。その non-finite form のページを捲ると、「動詞の形態を2つに分け文中において、文法上の主語に人称（PERSON）・数（NUMBER）・時制（TENSE）・法（MOOD）により限定される形態を定形（finite form）と呼び、それらに限定されない形態を非定形と呼ぶ」（同書932頁）とあり、非定形とは、学校文法で準動詞と呼ばれる不定詞・分詞・動名詞のことを指すと記されているだけである。2002年にCambridge大学出版局から出た *The Cambridge Grammar of the English Language* では、finite/infinite の対立を屈折からみる分類（inflectional category）ではなく、「文らしさ（独立文としての特性を持っているか）」という点から捉え、統語的分类（syntactic category）であるとしている。

もともと、この用語はラテン語（Latin）の動詞に見られる人称（person）

と数 (number) を示す用語であった。その両方が具現化される *verba finita* と、人称に関しては一致が現れない *verba infinita* があり、後者には、不定詞、分詞、動名詞、それに目的分詞 (スピーヌム) が含まれていた。この分類は、AD500 年頃にカエサレアのプリスキアヌス (Priscianus Caesariensis : ラテン語文法学者) が著わしたと言われる『文法学教程』 (*Institutiones Grammaticae*) によって流布し、文法記述のスタンダードとなり、そこに、後年、*tense* (時制) の概念が含まれるようになったと Nikolaeva (2007) は述べている。

しかしながら、そのような伝統的な分類法では *finiteness* は捉えられないことも知られている。例えば、ウガンダ中北部で話されている Lango 語 (ナイル・サハラ語族) のような言語では、時制 (*tense*) の情報が動詞に現れない。また、*finite* が独立した文 (主節) だけに現れるとする捉え方では、(1) のように、独立文としては機能しえない句 (*dependent-only form*) にも独立文と同じ形態 (*features*) が現れる西グリーンランド語 (West Greenlandic) は扱えなくなる。⁶

- (1) *niriursui-vunga* [aqagu urni-ssa-llutit]
 promise-IND.1SG tomorrow come.to-FUT-CONT.1SG.2SG
 'I promise to come to you tomorrow.'

このような状況を踏まえて、例えば、Johns and Smallwood (1999) などは「時制」(*tense* (T)) と「一致」(*agreement* (Agr)) に、「主節らしさ」(*main clausehood* (MC)) を加えた組み合わせのなかから、少なくとも次の 4 つの組み合わせが *non-finite* であると主張している。

- (2) -MC, -T, -Agr: English infinitives
 -MC, -T, +Agr: European Portuguese infinitives
 -MC, +T, -Agr: Tamil and Lezgian participles
 +MC, -T, -Agr: Russian and Middle Welsh infinitives.

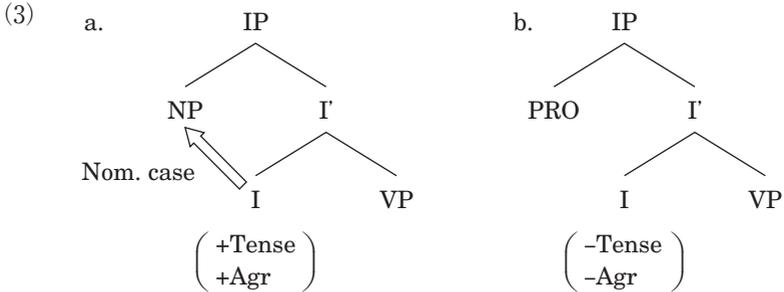
しかしながら、屈折を利用するアプローチは、当然のことながら、屈折の

ない中国語やベトナム語、あるいは主節でも従属節でも同じ形の動詞を用いるスレイビー語 (Slave: アサバスカ諸語 (カナダ北西部で話されている言語)) などには適用できないものである。

このような状況であるため、Cowper (2016) は “The term ‘finite’ has been used in the grammatical literature for centuries, but its meaning is difficult to pin down.” と述べ、Klein (2006) に至っては、“the notion of finiteness is used by everybody and understood by nobody.” と記している。つまり、finiteness は研究者の間では “the most poorly understood concepts of linguistic theory” の中のひとつであると認識されている (Ledgeway (2000))。

2.2. 生成文法における Finiteness

初期の生成文法は英語が主な研究対象であったため、finiteness ではなく、時制が Auxiliary (の一部) として組み込まれていた。⁷ 80年代の原理とパラメーター理論の中、Aux に代わり Inflection Phrase (IP) が整備され、その素性として [Tense] とともに [Agr (eement)] が組み込まれるようになった。それに伴い、すべての文には主語があるという EPP (拡大投射原理) が整備されていく。[Tense] と [Agr] において両方の値が+の場合には、Inflection 主要部 (INFL または I) が IP 指定部にある名詞句に主格 (Nominative case) を与える能力を持つと考えられた。それらの値が-の場合には主格を与えることができないので、語彙的 NP はそこに入ることができない (格フィルター)。よって格を持たないとされる音形のない代名詞 (PRO) がそこに現われることになる。この場合、I は *to* として具現化される。Finiteness が出てくるのは補文標識 (COMP) との関係である。



この I は上位の機能範疇である C と結びついており、C が [+finite] の場合は *that* が、[-finite] の場合は、*for* が現れ、いわゆる意味上の主語を示すことになる。

このシステムによって 70 年代前半に提案された二つの領域に関する条件（時制文の条件（Tensed-S Condition）と指定主語条件（Specified Subject Condition））の余剰性を取り除くことができるようになった。簡単に言えば、I の値が+の時は、時制文となり、語彙的主語が必要とされ、不透明領域（opaque domain）となるので、節内外の要素を関係づける規則は阻止される。他方、I の値が-の時には、不定詞補文となり（PRO がその主語の場合）節内外の要素を関係づけることが可能となる。

このように、原理とパラメーター理論による INFL 主要部の整備によって、agreement 現象と主格（Nominative case）付与に加え、節の領域（syntactic domain）の定義が行えるようになった。

しかしながら、このシステムは英語を中心として開発されたこともあり、ヨーロッパ言語のなかには英語のように説明できないものがある。イベリアポルトガル語（European Portuguese：ポルトガルで話されているポルトガル語）では不定詞（infinitive）節にも、agreement があり、ウェールズ語（Welsh）ではすべての infinitive において代名詞主語と agreement を見せるが、主文動詞（の選択）によって束縛領域（binding domain）が異なることが報告されている。その他にも、finite を原理とパラメーター理論の

ように組み込むと様々な問題が生じることが報告されているが、何らかの付加的な条件で調整することによって、大枠として理論に沿った形での解決案が提案されてきた。その試みは評価できるものであるものの、finite と infinite の普遍的な区分を弱めることになっているのも事実である。

3. 日本語における Finiteness

3.1. Finiteness と動詞

日本語には agreement (数、人称、或いは主節性 (Main Clause-hood : MC)) が (一部の例外はあるものの、通常は) ないので、いわゆるヨーロッパ言語に認められるような finite/infinite の対立は形態統語論的には現れない。しかしながら、日本語には意味的には finite/infinite の対立は存在すると考えられている。(Sells (1995) を参照のこと。)

英語の場合は、コントロール構文や繰り上げ (raising) 構文など (の補文の中) で用いられる動詞は、非定形 (原形) 動詞であり、独立した時制を持たず、意味的には未来志向とされる。これは日本語の場合にもあてはまる。次の (4) は、形式名詞「こと」を補文が修飾している名詞補文 (noun-complement) の形をとるコントロール構文と分析されている。

- (4) a. 太郎は [PRO 東京に行く] ことにした。
 b. 太郎は [自分が東京に行く] ことにした。
 c. * 太郎は [花子が東京に行く] ことにした。

(4b) のように、時に主語志向の代名詞「自分」が現れる場合もあるが、「自分」以外の語彙的主語が現れた場合 (= (4c)) は非文となる。ここでの動詞「行く」は非定形 (辞書形) であり、意味的には未来志向である。また、(5) に示すように、動詞を過去形で用いることは出来ない。⁸

- (5) a. * 太郎は [PRO 東京に行った] ことにした。
 b. * 太郎は [自分が東京に行った] ことにした。

c. * 太郎は [花子が東京に行った] ことにした。

これは「ように」を用いたコントロール構文でも同じである。

(6) a. 太郎は 花子に 東京に行くように 命じた。

b. * 太郎は 花子に 東京に行ったように 命じた。

つまり、日本語のコントロール構文においても、動詞は非定形（辞書形）で、それ自体の時制を持たないことから、そこに finiteness（この場合は [-finite]) が関与しているとも言える。

しかしながら、このような特定の環境以外では、日本語の動詞に finite/infinite の対立を確認することはできない。

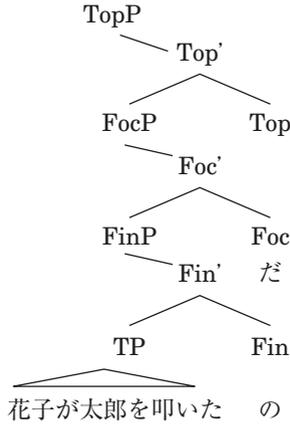
3.2. 名詞性

日本語生成文法では、コントロール構文などに現れる「こと」や「よう」は、補文標識 (COMP) として見做されてきた。近年、カートグラフィー研究を承け、その位置を CP 領域の中でもっとも TP 領域に近い Fin 主要部とする考え方が支持されてきている。ここでは、Fin 主要部に「の」が現れるとする研究の中から、Hiraiwa and Ishihara (2002) (以下、H&I) を取り上げよう。H&I は、(7) のような分裂文の派生を論じたものである。

(7) 花子が叩いたのは太郎をだ。

その前提として (8) のようなノダ文の構造を仮定する。

(8) 花子が太郎を叩いたのだ



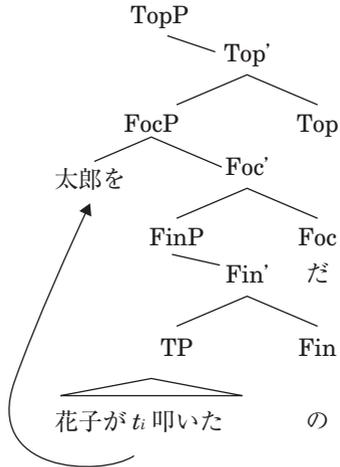
H&I は、形態素「の」を、カートグラフィー研究によって提案されている (9) のような分離 C (Split-C) の配列を利用して Fin 主要部にあるものとしている。

(9) [Force [Topic [Focus [(Topic) [Fin [TP]]]]]]

H&I によれば、分裂文はこのノダ文から派生的に (内的併合の繰り返しによって) 作られるという。その派生プロセスは以下のようなものである。

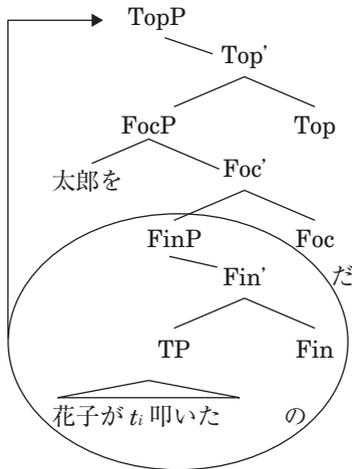
(10) に示すように、まず、目的語の「太郎を」が、Foc 指定部へ移動する。

(10)

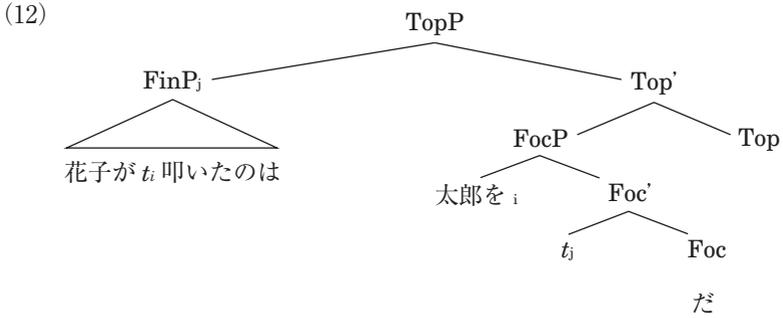


次に、焦点要素である FinP 全体が、主題化により TopP 指定部へ移動する。

(11)



FinP が TopP 指定部へ移動した後、最終的に得られる構造は (12) となる。



このように、分裂文は、ノダ文を土台として複数の内的併合により派生されると H&I は分析する。⁹

「の」は、日本語記述文法で形式名詞と呼ばれてきたことからわかるように、名詞に分類されてきた。次の (13) に見るように、「の」は格助詞を携えることができ、代名詞「それ」に置き換えることができることが、名詞性を有していることを示している。

- (13) a. 花子が太郎をたたいたのが先生の耳に入った。
 b. それが先生の耳に入った。

4. Finiteness と名詞性

前節では日本語の Fin 主要部には、名詞性を有する「の」が生起するとした H&I (2002) の分析を見たが、finiteness が動詞の屈折として具現化されるヨーロッパの言語でも、Fin 主要部に名詞性があることが、Rizzi (2006) らによって指摘されている。ここでは Rizzi (2006) による英語とフランス語を取り上げよう。

4.1. 英語

Rizzi (2006) によると、Fin 主要部に名詞性があることは、次の (14)

における対比に現れているという。(*t* は *who* が元にあった場所を示す痕跡 (trace) である。)

(14) a. Who do you think *t* will come?

b. *Who do you think that *t* will come?

ともに補文の主語にあたる *who* を主節の文頭に移動したものであるが、(14b) のように、補文の COMP に *that* が現れると非文となる。これは広く *that-trace* 効果という呼び名で知られた現象で、特に原理とパラメーター理論の時期において「統率 (government)」との関連から盛んに議論された現象である。「統率」の概念を破棄したミニマリストアプローチでこの問題をどう扱うかが課題であったが、Rizzi (2006) はこれらの違いを Fin 主要部が持つ名詞性から説明を試みたものである。Rizzi は、節構造に、主語要件を要求する Subject Phrase (SUBJP) を設定する。すると、(14a) の構造は次のようになる。

(15) who do you think [_{FinP} who [_{Fin} ∅] [_{SUBJP} [_{SUBJ} ∅] [_{TP} [_T will] come
who]

(15) では、*who* が SUBJP 指定部を飛び越えている点に注意しよう。もし、この *who* が主節の文頭に移動する際、SUBJP 指定部を通るとなると、Rizzi (2006) の提案する「基準による凍結の条件 (Criterial Freezing Condition)」に違反することになる。

(16) 基準による凍結の条件 (Criterial Freezing Condition)

A constituent which occupies its criterial position is frozen in place.

この条件は [+wh]、[+Top]、[+Foc]、[+Subj] などの素性を与えられた主要部の指定部の位置に、同じ素性をもつ X が移動すると、さらにそれ以上移動することができないことを規定する。*who* は主語としての役割を持っているので、SUBJP 指定部で留まらなければならない、そこから先には移動できない。そのために、その位置を飛び越し、FinP 指定部を通り、文頭に

移動していると考えられる。しかし、それでは、*who* が主語要件を満たすことができない。それに代わって、SUBJP の主要部を埋めると考えられるのが、(SUBJP の主要部を C コマンドしている) Fin 主要部であると Rizzi は提案する。主語要件は名詞的構成素によって充足されることから、空の Fin 主要部は名詞性を伴うことになる。他方、(14b) が非文となるのは、音声をもつ Fin 主要部の *that* は名詞性に欠けるためであると Rizzi (2006) は説明する。

4.2. フランス語

Fin 主要部が名詞性を持つことを示すフランス語のデータは次のような現象である。((17), (18) は Rizzi and Shlonsky (2007:130-1) からの引用。)

(17) a. **Quelle étudiante crois-tu [t' que [t va partir]]?*

'Which student do you believe that is going to leave?'

b. #*Quelle étudiante crois-tu [t' qui [t va partir]]?*

'Which student do you believe QUI is going to leave?'

(18) a. **L'homme [que [t est venu]]*

'The man who has come.'

b. *L'homme [qui [t est venu]]*

'The man QUI has come.'

(17) は補文の主語 *quelle étudiante* 'which student' が主節の文頭に移動する例であり、(18) は、主語の関係節化である。いずれの場合も補文標識 *que* では非文となるが、*qui* となる場合は容認される、あるいは文法的であることを示している。

補文標識 *qui* に見られる形態素 (-i) は Fin 主要部にある名詞的な素性 (nominal Fin) の具現化であると Rizzi and Shlonsky (2007) は分析する。(前節で見た英語の場合は、名詞性を持つのは空の Fin 主要部であった。) この名詞的な素性をもつ Fin 主要部が、主語要件を満たしているという。

5. 日本語における Fin 主要部の名詞性

Endo (2007) (遠藤 (2010) も参照のこと) は、日本語における Fin 主要部の持つ名詞性を終助詞と関係づけて論じている。

日本語文法における終助詞の研究は、その用法や機能を記述するものが中心であった (Uyeno (1971) など) が、Endo の研究は、終助詞が持つ統語論的な役割りを論じたものである。

まず、Endo (2007) は、Cinque (1999) の研究に基づき、終助詞 (の一部) は TP 内の Modality の位置に外的併合 (external merge) されると仮定する。その上で「の」に後続するもの (= (19a)) と、しないもの (= (19b)) があることに着目する。

(19) a. ジョンが来たの よ・ね・さ

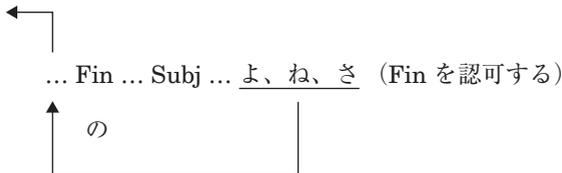
b. *ジョンが来たの わ・ぜ・ぞ

(20) a. ジョン よ・ね・さ

b. *ジョン わ・ぜ・ぞ

Endo は「よ・ね・さ」が名詞と結びつくという (20) の事実から、これらの終助詞が「の」の名詞性を認可する力があるという。これらの終助詞は元々 TP 内部にあり、Fin の名詞性を認可する必要から FinP 指定部に移動し、さらに高い位置に移動すると Endo (2007) は分析する。

(21)



これらの分析のもとになる観察は Miyagawa (2001) で用いられた主語と否定のスキープの関係を示すデータである。(ここでは便宜上議論を単純化して説明する。詳細は Miyagawa (2001) を参照のこと。)

- (22) a. 全員がピザを食べなかった。 All > Not
 b. 太郎は全部を食べなかった。 Not > All
 c. ピザを全員が食べなかった。 Not > All

(22a) は全面否定の解釈であるのに対し、(22b) では部分否定解釈となる。量化名詞句が否定のスコープ（作用域）に入る場合、部分否定解釈が生じるという観察（Kato (1985)）から言えば、(22a) における主語の「全員」は否定の作用域の外にあるのに対し、(22b) の目的語（全部）は作用域内にあるということになる。Miyagawa (2001) は目的語の「ピザを」が scrambling された (22c) に注目する。そこに部分解釈が見られるのは目的語が scrambling によって（主語である「全員が」に代わり）TP 指定部を埋めることで EPP を満たし、そのために「全員が」が否定の作用域に残ると分析する。

Endo (2007) はこの否定のスコープによる分析を用いて Fin 主要部の名詞性を主張する。(23) における終助詞と否定のスコープの關係に着目しよう。

- (23) a. (たぶん) 全員がピザを食べなかった のね・のさ・のよ。
 b. (まさか) 全員がそんなまずいピザを食べない よ・よね・さ・か。
 c. 全員がピザを食べなかった わ・ぞ・ぜ。

判断は多少微妙であるという断りを付けた上で、Endo は、(23a) と (23b) では部分否定解釈も可能なのに対し、(23c) にはそれがないことを指摘している。¹⁰ (23a, b) で用いられている終助詞によって認可された Fin 主要部の名詞性が、それが c-command する T の EPP 特性を満たすので、「全員が」が TP 指定部に移動する必要がないと Endo は分析している。つまり、終助詞「よ、ね、さ」の付加が Fin 主要部の名詞性を通して主語要件を満たすのである。¹¹

Endo (2007) の分析は、類型論的に異なる日本語の現象をヨーロッパの言語と同種のメカニズムで説明するという点において、評価できるものであ

る。それまでの終助詞の研究が談話機能の視点から行われてきたのに対し、統語構造との関係に光をあて、同時に UG の観点から終助詞の役割を捉えようとした試みとして評価されるべきものである。

筆者は、UG を掲げた研究が興味深い言語現象を発掘し、UG の視点なしでは気づかれなかった現象の裏側のメカニズムを見つけ出すこれまで生成文法がもたらした研究成果を高く評価する者である。しかしながら、進化論の問題を掲げる現在の生成文法では、UG のカバーする範囲が極めて限定的になることから、これまでの UG の想定から得られた結果に再検討を加える時期に差し掛かっているのではないかと考えている。たとえそれが普遍性から外れるとしても、それが生成文法のこれまで積み重ねてきた研究を活かす重要な方向だと思われる。

そのような見解に加え、Endo (2007) の問題となりうる 3 つの点について触れておこう。

一つ目の点は、Radford (2018) が Endo の *how come* に関する FINP 分析に対して述べている問題点でもある。Rizzi らの挙げている Fin の持つ名詞性は、agreement に関与するものである。もし、主語要件を満たすのは agreement であるとすれば、agreement が (一般的には) 認められない日本語に、同様の分析があてはまるのであろうか。仮に Endo が正しく、日本語でも FIN 主要部の名詞性があるとしても、ヨーロッパ言語のそれとは根本的なところで異なる可能性がある。

二つ目の点は、Saito (2006) が指摘したように、EPP は T が担っているとする分析は、(24) のような経験的な問題を孕んでいる。¹²

(24) 自分自身_iを全員_iが責めなかった。(全部否定解釈+部分否定解釈)
Saito は、目的語の TP 指定部 (A 位置) への scrambling が、Miyagawa (2001) の主張するように、T が持つ EPP 特性によるものだとすると、この文は照応形 (anaphor) の「自分自身」を C コマンドする先行詞がないことから非文となるはずだと指摘する。その上で、Saito は、(24) が文法的

であり、部分否定解釈があることから、日本語の節構造のさらなる精緻化を提案している。

ここで、(24) に問題の終助詞を付加した場合の解釈を取り上げたい。

(25) 自分自身_iを全員_iが責めなかったよね。

(25) は (24) と解釈において異なるかどうかであるが、筆者の判断ではそのような解釈上の差異はないように思われる。このことは、終助詞が Fin 主要部と協働して主語要件を満たす力が optional であることを示していることになる。もしそれが optional でなく obligatory であるならば、部分否定解釈しかないはずである。しかし、先にみたフランス語の場合は、optionality は見られない。もちろん、技術的な修正によりこの問題を回避することができるかもしれない。しかし、そのような修正は、UG による説明を弱めるものになってしまう。

三つ目の点は、概念的なもので、UG を目指すことによる個別文法への負担（不自然さ）の問題である。Endo (2007) によれば（一部の）終助詞は TP より下位で併合 (merge) され、その後最上位 (= 文末) まで移動するとしている。¹³ しかし、このような移動は、Cinque (1999) の副詞の階層に合わせるために仮定されているという感が拭い去れない。終助詞は Modality と機能が重複しているという認識は正しいと思われるが、その理由で終助詞を TP 内に仮定するのは、個別文法から見れば、すぐには首肯しにくいものである。

以上のような点からも、Endo (2007) の代案を探す意義があると思われる。

6. 「が」格主語と主語の位置

6.1. Familiarity

代案を見る前に Endo (2007) が指摘した主語要件を満たす終助詞に関する興味深い観察に触れておきたい。Endo は、EPP 効果をもたらす終助詞に

は共通性があることに気づいており、それを familiarity という名称で呼んでいる。Endo (2007:178) は、この familiarity の概念を “...to report familiarity by the speaker about the proposition, implying that the sentence should be taken as a matter of fact.” と説明している。つまり、話し手が伝達する事態（命題）を事実として自分自身で把握（理解）した上で相手に提示するということになる。

この、Endo (2007) が考察した「よ」、「ね」、「さ」に共通する familiarity の概念が、本稿で提案する分析と深く関係することになる。では、familiarity がどのように関係するのであろうか。これについては、6.3 で論じることになるが、その前に、Endo の代案の土台となる、日本語の数量詞遊離の生起分布をカートグラフィー研究から論じた Akaso (2018)（並びに赤楚 (2019)）を見ることにしよう。

6.2. Akaso (2018) の数量詞遊離の分析

Akaso (2018) は、日本語における主語からの数量詞遊離の認可条件として、Transfer によって CI-interface に送られる時点において、主語と遊離数量詞が共に同じ vP 領域（命題領域）になければならないと提案する。次の (26a) が日本語における数量詞遊離現象の典型例である。

(26) a. [_{NP} 学生] が 3人酒を飲んだ。

b. [_{NP} 3人の学生] が酒を飲んだ。

数量詞「3人」は (26b) のように修飾する名詞（ホスト名詞）「学生」の直前に置かれる場合もあるが、(26a) のように、ホスト名詞から切り離されても文法的となる。しかし、(27) に示すように目的語の右側に数量詞を移動させた場合には非文となることが知られている。

(27) * [_{NP} 学生] が酒を 3人飲んだ。

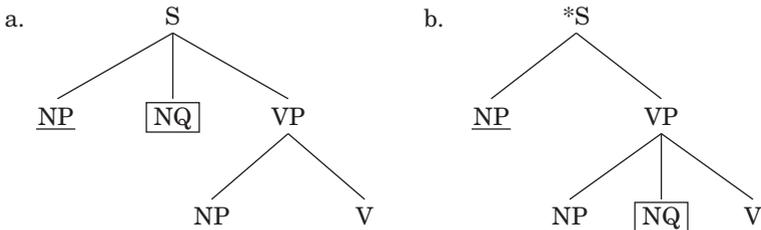
Akaso (2018) が「黒田・Haig の一般化」と呼んだこの言語事実は、1980年に黒田 (1980) と Haig (1980) がそれぞれ単独で指摘したものである。こ

の一般化に対して統語構造からの説明を試みたのが Miyagawa (1989) である。Miyagawa は、二次述語との類似性から、数量詞遊離構文において、ホスト名詞句とその数量詞が一定の統語的關係に置かれなければならないと主張した。この「相互 C 統御制約」(the Mutual C-Command Requirement) と名付けられた制約は、次のように定式化される。

(28) 数量詞 (またはその痕跡) とそれが修飾する名詞句 (またはその痕跡) は互いに C 統御していなければならない。(Miyagawa (1989:30))

(26a) と (27) の構造をざっくりと示すと、それぞれ (29a) と (29b) のようになる。¹⁴

(29)



文法的な (29a) の場合はホスト NP (下線部) と NQ が相互 C コマンドの關係にあるのに対し、NQ が目的語の後ろに置かれた (29b) の場合、相互 C コマンドの關係が成立していないために非文となる。

しかしながら、この分析が発表されると、様々な反例が報告されるようになる。(片桐 (1992)、高見 (1998)、三原 (1998) など)

Akaso (2018) が着目するのは、そのような反例自体ではなく、高見・久野 (2014:115) におけるコアデータ (25) に関する指摘である。

私達も含めた多くの日本人にとって、このパターンの文は、不自然、あるいは「ちょっとひっかかる」程度の不適格性、すなわち、?/?? で表わされるべき不適格性で、* で表わされるべき不適格性ではない。…

この種の数量詞遊離パターンの文の適格性判断には、話し手の間で揺れがあり、また同じ話し手でも、時によって異なった判断をすることが稀でない。

すなわち、高見・久野（2014）によれば、(27) のような文は、完全な文とは言えないまでも、容認可能の範囲であり、非文法的であると見なすことはできないと主張し、さらに、同一の個人によっても時に異なる判断をすることがあるという。

反例の存在は、日本語数量詞遊離現象が統語構造的条件だけで説明できるものではないことを明らかにしたが、このコアデータの「ぶれ」については、論者の知る限り、正面から論じられることはなかった。Akaso (2018) は、それまで挙げられてきた反例を利用することによって、この「ぶれ」の説明を試みた研究である。Akaso が利用した反例とは次のようなものである。

(30) a. 学生がレポートを 3 人だけ提出した。

b. 水着姿の女性が楽しそうに 5 人泳いでいた。

c. 昨日は閉館間際まで、学生が図書館分室で 30 人勉強したらしい。

d. 水着姿の女性がアイスクリームを 5 人食べたのだ。(石川 (2016))

それぞれの反例は、(30a) は取り立て詞（「だけ」）が付加された文、(30b) は進行相の「ている」が加えられた文、(30c) はある期間（この場合、分室の閉館時間まで）を区切って観察した文（三原（1998）の言う「時間的限定性条件」）、そして、(30d) は、ノダ文として知られている文である。

これまでの研究は、それぞれの反例がなぜ文法的な文になるのかを個別的に扱うものであったが、Akaso (2018) はこれらの反例をマクロな観点から捉え、それらに見られる共通点に着目する。

(30a) の取り立て詞に関しては、Akaso and Haraguchi (2011) の「ガ・ノ交替」の研究から FocP が関与していることがわかっている。(30b) の

「ている」形は、これまでアスペクト（進行相）表現としか捉えられてこなかったが、定延（2006:172）が「観察してみると現在これこれである（これこれのデキゴト情報がある）」ということを表すエヴィデンシャル（証拠性）である」と指摘している。さらに、証拠性を認可する階層は、右端部（right periphery）にあると Tenny（2006）は論じている。(30c)の「らしい」は、典型的な証拠性表現として理解されてきた。(30d)のノダ構文は、フォーカス（focus）構文の一種とみなすことができ、CP領域のFocusが関与していると考えられる。つまり、上で見た反例はすべて、何らかの形で、右端部であるCP領域が関与していることがわかる。

では、なぜ、右端部が用いられると、相互Cコマンド条件に抵触しても文法的な文と判断されるのであろうか。Akaso（2018）は、そこにはガ格主語の機能と位置が関係すると分析する。

周知の通り、久野（1973）以来、日本語の主格を担うガ格には、総記（Exhaustive Listing）と中立叙述（Neutral Description）の2つの機能があると認識されてきた。前者は、主語NPが焦点化され、「そのみ」という意味が強調されるものであるのに対し、後者にはそのような意味合いがなく、事態（命題）を客観的に述べるときに用いられるものである。

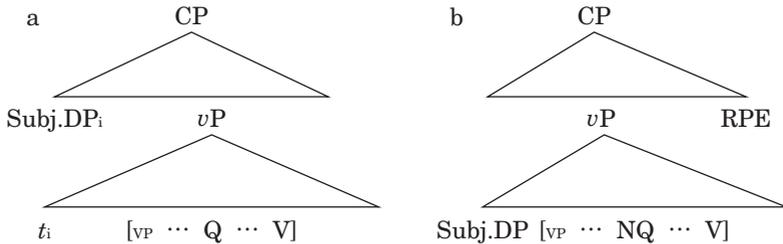
生成文法は、久しく、統語論の自律性テーゼに沿って、談話的要因を切り離し、研究対象を命題としての「文」に限定していたため、総記のガ格に焦点化が伴うという認識は生成文法研究者の間で共有されてはいたものの、それはあくまでも機能の問題であり、統語構造を扱う生成文法の守備範囲外にあり、ガ格の解釈の違いを構造的に表すことを積極的に行ってこなかった。¹⁵

ところが、90年代半ばにカートグラフィー研究がヨーロッパで始まり、その成果が現われてくると、日本語でも談話と統語論の関係が見直されるようになった。このアプローチを踏まえると、焦点（フォーカス）解釈があるガ格主語は、CP領域（＝談話領域）にあるFocus句（FocP）の指定部に

移動すると仮定できる。つまり、総記解釈のガ格主語は Foc 指定部にあるという考えである。他方、中立叙述解釈のガ格主語はこれまで考えられてきたようにそれよりも下位である命題領域にあると仮定できることになる。本稿では、この仮定に沿って議論を進めていくことにする。^{16,17}

先に確認したように、総記のガ格主語は CP 内（談話領域）で認可されるとすると、下の (31) のような構造になる。右端部を使わない場合は (31a) のような構造になり、使う場合は (31b) となる。(RPE = Right Periphery Element (右端部要素))

(31)



ここで注目すべきは、両方の場合において、ガ格主語と遊離数量詞は相互 C 統御の関係にはない点である。つまり、相互 C 統御の関係でこれらを捉えることはできないということがわかる。そこで、Akaso (2018) は、遊離数量詞の認可条件として、意味解釈に送られるときに、ホスト名詞と数量詞が同じ領域にあることによって関係が結べるとし、次のような代案を提案している。¹⁸

(32) 遊離数量詞の統語的制約：ホスト名詞句とその遊離数量詞は vP (= 命題領域) において共存しなければならない。

このようにして Akaso (2018) は右端部の活用の有無がガ格主語の統語的位置に影響するという観点から日本語の数量詞遊離現象に見られる「ぶれ」を説明する。先述のコアデータの「ぶれ」は、ガ格主語の解釈によるもので、明示的な右端部要素が現れない場合には総じて主語が総記として解釈

される傾向が強いが、現れない場合でも（特に書き言葉においては）中立叙述として解釈することも可能であることに起因すると Akaso は分析している。

6.3. 代案

ここでは、数量詞遊離に関する (32) の正否はさておき、本題に戻ることになろう。我々の問題は、Endo (2007:178) が指摘した familiarity の機能を有する終助詞が Fin 主要部の名詞性を認可することによって、EPP を満たすような振る舞いを見せるのはなぜかというものであった。

これに関して、Akaso (2018) は長谷川 (2008) の主文における中立叙述解釈の可能性についての洞察に着目する。

(33) a. *? おや、太郎が本を読んだ。

b. *? あれっ、花子が太郎に電話する。

(34) a. おや、太郎が本を読んでいる。

b. あれっ、花子が太郎に電話してる。

(35) a. おや、太郎が本を読んだ {ぞ/よ/*か/*さ}。

b. あれっ、花子が太郎に電話する {ぞ/よ/*か/*さ}。

長谷川によると、(33) は、「おや」が出現すると、極めて「座りの悪い」文になってしまう。他方、(34) のように進行相の「ている」形を用いたり、(35) のようにある種の終助詞を用いると、自然な、落ち着いた文となるという。長谷川 (2008) は、これを、「ている」形やそれらの終助詞を用いることで、「眼前の状況」を述べる提示文としての機能を帯び、客観的な描写を伝える文となり、中立叙述解釈が生じるためであると説明する。言い換えると、主文においてガ格主語が中立叙述解釈を持つには、「話者が気づいた眼前の動的・変化自体を「新情報」として「描写」という「提示文」の機能」(長谷川 (2008:70)) を有している必要があるということになる。

つまり、提示文におけるガ格主語は総記解釈ではなく（よって FocP 指定

部にあるのではなく)、外的併合 (external merge、或いは基底生成) の場所 (*vP* 指定部) にとどまり、それにより中立叙述として解釈されることになる。

長谷川 (2008) が論じる提示文の機能は、Endo (2007) が指摘する終助詞 (「よ」「ね」「さ」) の機能と軌を一にするものである。¹⁹ Endo によれば、familiarity とは、話し手が伝達する情報を事実として受諾しているというものであったが、それは、上で見た提示文や命題の言語的表出の機能と同じものである。つまり、単なる命題の伝達ではなく、その内容を事実として聞き手に届けているわけである。

また、長谷川は進行相の「ている」にもその機能があると指摘している。この機能は、先に見たように、証拠性の表現としての機能でもある。証拠性表現と同様に、終助詞もその生起位置からも機能からもわかるように、CP 領域である右端部を活用する右端部要素である。²⁰ つまり、Endo が Fin 主要部の名詞性をもって EPP を充足させることができるという終助詞は、証拠性表現と同じく、ガ格主語を中立叙述の主語の位置 (命題領域 (*vP* 指定部)) に残す効果がある。これにより、Endo が示したように、全量数量詞の主語が中立叙述のガ格主語の位置にとどまり、否定のスコープに入るため、部分否定解釈が生じると考えられる。つまり、familiarity を示す終助詞は、それが付加する命題を提示文或いは命題の言語的表出にする機能があり、そのために主語が中立叙述と解釈されるのである。²¹

この分析が正しければ、日本語の終助詞が Fin 主要部の名詞性を示す証拠とはならないことになる。

7. おわりに

普遍的な定義が難しい finiteness は、近年のカートグラフィー研究によって CP 領域の最下位に位置する主要部であるとされ、ヨーロッパ言語においては主語要件との関連から Fin 主要部は名詞性を有することが論じられた。Fin 主要部が持つ名詞性は、日本語においても、終助詞の分析によって示すことができると Endo (2007) が指摘した。本稿では、Endo がその分析のために扱った言語事実(否定のスコープ)は、UG 的な観点に立たずとも、日本語のもつ特性(ガ格主語の位置と右端部表現との関係)から説明できることを示した。Endo のいう familiarity を示す終助詞には、付加する命題を提示文とする機能があり、それによりガ格名詞が中立叙述として元位置(否定のスコープ内)に残り、Endo が示すようなデータとなることを論じた。

注

『主流』査読者からの非常に有益なコメントは、本稿を完成するにあたり大きな助けとなった。ここに記して感謝したい。ただし、本稿に残る不備な点は筆者がすべての責任を負うものであることは言うまでもない。なお、本研究は、JSPS 科研費(基盤研究(C))「Finiteness-head の特性の解明」(代表: 赤楚治之) JP16K02785 の助成を受けたものである。

1. 例えば、栗原(2010)や Saito(2013)など。
2. 井上(1976)はこれを名詞的補文標識(nominal complementizer)と呼んでいる。
3. Chomsky(2012:277)のなかで、McGilvary は UG について次のように解説している。

“Universal Grammar, or UG, if identified with what biology (the genome) specifies, might be very small and remarkably simple (unlike earlier ‘format model of UG) – perhaps Merge alone.”

4. そこには、もちろん、機能主義文法や認知言語学からの説明も含まれる。しかし、筆者の念頭にあるのは統語論的な説明である。

5. 本研究は、Fin 主要部が（終助詞と協働し）EPP を満たすとする Endo (2007) の分析の代案を提案するものであるが、Fin 主要部に名詞性がないと主張するものではない。
6. *contemporative mood* と呼ばれているものである。なお、ここで用いられている略語は次の通りである。
- IND : indicative SG : singular FUT : future
CONT : contemporative
7. Chomsky (1965) の索引に 'finite' の項目はない。
8. (5) における「～にした」を *epistemic* な意味で解釈すれば、(5) はいずれも文法的な文であることを査読者から指摘を受けた。その場合は、コントロール構文ではなくなる。
9. 精緻化された CP を用いてはいないが、Hasegawa (1997) は H&I よりも前に分裂文がノダ文から派生されるという分析をしている。
10. (23b) における文副詞「まさか」は否定的な意味合いを含むもの (*negative implication*) ことも部分否定解釈に関わっていると Endo (2007:186) は指摘している。
11. 全部否定もあることは、「全員が」の移動がもう少し複雑なものである可能性が考えられる。この点については、再度、本文で触れることになる。
12. その後 Miyagawa (2011) でこの考え方を修正している。
13. あるいは（音としての）終助詞は文末にあるが、空の演算子 (*Operator*) が TP 内から移動するという分析も可能であるかもしれないが、Endo はそれを採用していない。
14. Miyagawa (1989) では、文を S とし、三又 (*tertiary*) 構造を許す構造を仮定していたが、後年、Miyagawa and Arikawa (2006) で機能範疇並びに二又 (*binary*) 構造を採用し、Miyagawa (1989) への反例に対して説明を試みている。ここでは、議論をわかりやすくするために、Miyagawa (1989) の枠組みを用いて解説することにするが、本研究の分析には直接影響するものではない。
15. Chomsky が *Topic* や *Focus* などといった談話的要因については重要であるという認識を持ちながらも、それを暫定的に棚上げしてきたことは、Chomsky (1995:220) の次の引用から伺える。

"Notice that I am sweeping under the rug questions of considerable significance, notably, questions about what in the earlier Extended Standard Theory (EST) framework were called "surface effects" on interpretation. These are manifold, involving topic-focus and theme-rheme structures, figure-ground properties, effects of adjacency and linearity, and many others. Prima

facie, they seem to involve some additional level or levels internal to the phonological component, postmorphology but prephonetic, accessed at the interface along with PF (Phonetic Form) and LF (Logical Form).”

16. 日本語のカートグラフィーに関しては遠藤 (2014) を参照せよ。カートグラフィーを取り入れた日本語の主語位置については Fujimaki (2011) を参照のこと。
17. 中立叙述の場合、vP 指定部に留まった場合、EPP はどうなるかという問題が当然上がってくる。EPP の定義の問題が関わってくるが、日本語においては、Kuroda (1988) などが主張したように、TP 指定部に上がる必要は必ずしもない。つまり、TP 指定部を埋めるというのが EPP であるとすれば、日本語の場合は EPP は obligatory でないことになる。
18. Akaso (2018) は phase 全体が spell-out されるとする Bošković (2016) の考え方を採用している。
19. 長谷川の例文 (35) では「さ」が非文となっている。これは「さ」の持つ機能がここでの「驚き」などの間投詞と意味的整合性がないためだと考えられる。また、「ぞ」は、(35) では容認される一方で、Endo (2007) が判断する (23c) の否定のスコープにおいては、「ぞ」の付加は部分否定解釈に結びついていない点について査読者から指摘があった。つまり、「ぞ」に提示文にする機能があるとすれば、否定のスコープにおいて部分否定解釈がなければならないはずである。これについては、現段階では明確な答えを持ち合わせていないが、筆者は、長谷川 (2008) が脚注 13 で触れているように、「ぞ」には「伝達の遂行」の機能があり、それによって「提示文」の機能が消えるためではないかと考えている。例えば、提示文にするために、長谷川は文頭に適切な間投詞が必要であるとしているが、(23c) に、その間投詞を付加すると、筆者の判断するところでは、部分否定解釈が出てくるように思える。

(iii) あれっ、全員がピザを食べなかったぞ。

これは、(23c) の「ぞ」が伝達の遂行であるのに対し、(iii) では提示文にする「ぞ」が機能しているためではないかと考えられる。

20. 査読者から、進行相の「ている」を単純に右端部要素としてまとめてよいかという指摘があったが、この点についても現段階では明らかではない。ひとつの可能性は、Endo (2008) の終助詞分析と同じく、「ている」はまず Aspect 主要部に merge された後、証拠性の素性認可のために談話領域 (CP 領域) に移動する、あるいは空演算子が移動するという分析である。
21. 日本語の発話においては、主文の述語が単純形 (終助詞や「ている」などを含まないケース) で用いられると一般的に不自然になるという指摘を査読者から受けた。その「不自然さ」をどう扱うのかについては、文法性や容認性の捉え方・定義に関

する難解な問題が出てくることは確かであり、本研究では到底扱うことができない生成文法にとっての大きなテーマ・課題のひとつである。

参考文献

- Akaso, N. (2018). *Phase as the spell-out domain and Japanese Q-float*. A poster presentation in Current Issues in Comparative Syntax at National University of Singapore (March 1st).
- 赤楚治之 (2019). 日本語の数量詞遊離文：判断の揺れはなぜ起きるのか. 藤岡克則, 北林利治, 長谷部陽一郎 (編), 『ことばとの対話—記述・理論・言語教育』. 東京：英宝社.
- Akaso, N., & Haraguchi, T. (2011). On the categorial status of Japanese relative clauses. *English Linguistics* 28, (1) 91-106.
- 荒木一雄, 安井稔 (編) (1992) 『現代英文法辞典』. 東京：三省堂.
- Bošković, Ž. (2016) What is sent to spell-out is phases, not phasal complements. *Linguistic* 56: 25-56.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (2012). *The science of language: Interview with James McGilvary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cinque, G. (1999). *Adverbials and functional heads: A cross linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Cowper, E. (2016). Finiteness and pseudofiniteness. In K. M. Eide (Ed.), *Finiteness matters* (pp. 47-77). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Endo, Y. (2007). *Locality and information structure: A cartographic approach to Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 遠藤喜雄 (2010). 終助詞のカートグラフィー. 長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究 (命題を超えて)』 (pp. 67-94). 東京：開拓社.
- 遠藤喜雄 (2014). 『日本語カートグラフィー序説』 東京：ひつじ書房.
- Fujimaki, K. (2011). The position of nominative NPs in Japanese: Evidence for nominative NPs in-situ. *Journal of Japanese Linguistics* 27, 107-130.
- Haig, John H. (1980). Some observations on quantifier floating in Japanese. *Linguistics* 18, 1065-1083.
- Hasegawa, N. (1997). A copula-based analysis of Japanese clefts: *Wa*-Cleft and *Ga*-Cleft. 井上和子 (編), 『先端的言語理論の構築とその多角的な実証 (I-A)』 平成 9

- 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告 (1)] (pp. 15-38). 神田外語大学.
- 長谷川信子 (2008). 提示文としての中立叙述文. 金子義明他 (編). 『言語研究の現在: 形式と意味のインターフェース』 (pp. 62-80). 東京: 開拓社.
- Hiraiwa, K., & Ishihara, S. (2002). Missing links: Cleft, sluicing, and 'no da' construction in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 34-54.
- Huddleston, R., & Pullum, G. K. (Eds.). (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上和子 (1976). 『変形文法と日本語』東京: 大修館書店.
- 石川浩一 (2016). 日本語における数量詞連結: 統語論的アプローチの例外「のだ」文を考える. 第8回北海道理論言語学研究会での口頭発表 (2016年3月6日: 旭川医科大学).
- Johns, A., & Smallwood, C. (1999). On (non-)finiteness in Inuktitut. *Toronto Working Papers in Linguistics* 17, 159-70.
- 片桐真澄 (1992). 書評論文 (Miyagawa (1989)). 『言語研究』101. 146-158.
- Kato, Y. (1985). Negative sentences in Japanese. *Sophia Linguistica: Working Papers in Linguistics* 19. Sophia University.
- Klein, W. (2006). On finiteness. In V. van Geenhoven (Ed.), *Semantics in acquisition* (pp. 245-272). Heidelberg: Springer.
- 久野暉 (1973). 『日本文法研究』東京: 大修館書店.
- 黒田成幸 (1980). 文構造の比較. 國廣哲弥 (編) 『日英語比較講座2 文法』 (pp. 23-61). 東京: 大修館書店.
- Kuroda, S.-Y. (1988) Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticæ Investigationes* 12, 1-47.
- 榎原和生 (2010). 日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造. 長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究 (命題を超えて)』 (pp. 95-127). 東京: 開拓社
- Ledgeway, A. (2000). *A comparative syntax of the dialects of Southern Italy*. Oxford: Blackwell.
- 三原健一 (2012). 数量詞遊離構文とアスペクト制約. 澤田治美 (編) 『構文と意味』 (pp. 221-239) 東京: ひつじ書房.
- 三原健一 (1998). 数量詞連結構文と「結果」の含意. 『月刊言語』27 (6) 86-95, (7) 94-102, (3) 104-113. 東京: 大修館書店.
- Miyagawa, S. (1989). *Structure and case marking in Japanese. (Syntax and Semantics 22)*. San Diego: Academic Press.
- Miyagawa, S. (2001). The EPP, scrambling, and *wh*-in-situ. In M. Kenstowicz

- (Ed.), *Ken Hale: A life in language* (pp. 293-338). Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Miyagawa, S. (2011). *Why agree? Why move? Unifying agreement-based and discourse-configurational languages*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Miyagawa, S., & Arikawa, K. (2007). Locality in syntax and floating numeral quantifier. *Linguistic Inquiry* 38, 645-670.
- Nikolaeva, I. (2007). Introduction. In I. Nikolaeva (Ed.), *Finiteness: Theoretical and empirical foundations* (pp. 1-19). Oxford: Oxford University Press.
- Radford, A. (2018) *Colloquial English: structure and variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, L. (1997). The fine structure of the left periphery. In L. Haegeman (Ed.), *Elements of grammar: Handbook in generative syntax* (pp. 281-337). Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, L. (2006). On the form of chains: Criterial positions and EPP effects. In L. Cheng, & Corver N. (Eds.), *Wh-movement: Moving on* (pp. 97-133). Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Rizzi, L., & Shlonsky, U. (2007). Strategies of subject extraction. In U. Sauerland, & H.-M. Gärtner (Eds.), *Interfaces + Recursion = Language?* (pp. 115-160). Berlin: Mouton de Gruyter.
- 定延利之 (2006). 心内情報の帰属と管理：現代日本語共通語「ている」のエビデンス的な性質について. 定延 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界』』 (pp. 167-192). 東京：くろしお出版.
- Saito, M. (2013). Conditions on Japanese phrase structure: From morphology to pragmatics. *Nanzan Linguistics* 9, 119-145.
- Sells, P. (1995). Korean and Japanese morphology from a lexical perspective. *Linguistics Inquiry* 26, 277-325.
- 高見健一 (1998). 日本語数量詞について：機能論的分析. 『月刊言語』 27 (1) 86-95. (2) 86-95, (3) 96-112. 東京：大修館書店.
- 高見健一・久野暉 (2014). 『日本語構文の意味と機能を探る』 東京：くろしお出版.
- Tenny, C. (2006). Evidentiality, experiencers, and syntax of sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15, 245-288.
- Uyeno, T. (1971). *A study of Japanese modality: A performance analysis of Japanese particles*. Ph.D dissertation, University of Michigan.